薩摩藩士高橋、前田献吉、弟正名の三人は何れも長崎で何礼之の英語塾で学んだ。高橋は渡米を渇望していたが渡航費の捻出は困難で、葵慎吾と言う人物に相談した。すると高額で一般の手に入り難い「袖珍辞書」を安価で改訂増版すれば洋行費が稼げると答えた。件の計画に前田献吉が加わり4年後に葵慎吾が抜けて正名が加わった。これに助力したのは眼科医学修業者行徳とフエルベック（G.F Verbeck）である。二人に英語を教わりながら昼夜兼行で刻苦勉励、明治元年（1868）戊辰戦争前にやっと脱稿した。この時高橋25才、献吉33才正名18才である。フエルベックは、オランダ生まれのアメリカ人宣教師で英語塾の教師でもあり、上海の美華書院印刷所（American Presbyterian Mission Press）を紹介した。その頃の我が国の技術では活字印刷は不可能であった。この英辞書は大きさ16.2×24cm、和文序1頁、Preface 1頁、本文677頁等合わせて700頁である。長文のPrefaceを和文序で示すと「皇国二英学ノ行ハルルハ他二非ラス　所謂彼ノ長ヲ取リ我ノ短ヲ補ハンカ為ナリ　其ノ長ヲ取リ短ヲ補ウハ皇化ヲ万国二輝カサンカ為ナリ　サレハ其行ハルルハ　其ノ意ヲ詳二シ　其解ヲ精シクセテハ得アランコトナリ・・」明治二歳己巳正月日本日本薩摩学生」と編集の動機及び経緯を述べるが「日本薩摩学生」とのみ表して彼らの名前を秘したのは自分たちの実力が恥ずかしく名を出す気になれなかったからだという。正式には「改正増補和譯英辞書」で表紙にThird Edition Revised とあるのは「袖珍辞書」の第三版の意味で、要点は、語義の誤謬訂正や補充、有用語と廃語の加除、英語の脇にカタカナで発音を付けた事、難漢字にフリガナをつけた事などであった。

発行部数は1500部で値は12両。その内300部の売り上げ代で正名は先に仏国へ渡航。これが兄献吉と不和を生んだ元になったという。第4版「大正英字林」は高橋と兄献吉が編集した。後、米国へ留学した高橋新吉は大蔵省入省、各地税関長、2代目日本勧業　銀行総裁。前田献吉も米国留学、上海領事館・海軍軍医学校・軍艦勤務後元山総領事、釜山総領事。

［前田正名］

明治2（1869）年仏国代理公使総領事コント・モンブランの随行員としてパリへ渡航した正名のその後は、明治11（1878）年のパリ万国博事務館長、「興業意見」全30巻編纂、入省して農商務次官に上り詰めるが、農商務相陸奥宗光と対立して下野。彼の地方産業の近代化こそが優先と言う主張は、政府の中央集権策とは相対立した。故に明治25（1892）年頃から「前田行脚」と称して「脚絆に股引、蓑と笠、手にコーモリ傘」の出で立ちで全国隈なく遊説、一生を地方産業育成に捧げたので世人は彼を「布衣の農相」と呼ぶ。正名が地方に残した足跡は、①山梨県知事時代に甲州ブドウの普及、神戸オリーブ園・播州ぶどう園経営を通じて国産ワイン生産の端緒。②宮崎県の開田事業③北海道で最初の製紙会社。④「郡是製紙（現グンゼ）」設立に貢献。「郡是」は前田の「今日の急務は国是・県是・郡是・村是を定むるにあり」から来ている。⑤阿寒湖温泉発展に寄与等である。

その他日本茶業会、大日本農会、五二会（織物・陶器・銅器・漆器・製紙5品に彫刻・敷物の伝統的輸出工芸品）、日本蚕糸会、日本貿易会、日本商工会、九州石炭同盟会、日本燐寸義会、全国農事会、大日本木蝋会、全国酒造組合連合会、大日本畜産会の組織化に尽力、明治27（1894）年これら諸団体を全国実業各団体連合会に統括させた。

明治28（1895）年10月には山陰にも足を踏み入れた。時に46才。19日の津和野を皮切りに益田、浜田、大田、松江に来て境港、米子、鳥取と10日間に及ぶものだった。24日の松江は「黒住教会所、機業奨励会発会式200余名。同市榮徳座実業大会、3時間余の講演4千余名」で、4千名とは可成り多い。「天神社域内劇場榮徳座前人市を為す、巡査両三名制するも聴かばこそ、扉を排して進み鯨波を揚げて突入する状、恰も怒涛の巨巌に激する如し（略）舞臺より之を眺めなば人面の石垣とや言わん、忘れ草の烟は朦々として霧の如く寸前を分かたず、その聴衆は無慮五千余名云々」とある。午後3時30分から休憩を挟んで6時30分まで、その説く所は「旧藩主は各々雲州の人参木綿、薩摩の砂糖、尾張伊予の陶器を育てて地域産業を奨励したが、明治の今日なればこれを日本の産業となすこと、全国の道路事情を知る私には島根県の国道は立派で日本第一であるが、経費一百万円は島根県人にはそれ程の事ではないにしても、島根県の経済状況は輸出より輸入超であり、国道完全にも拘わらず、港湾増殖等あらゆる事業が不完全だからではないか。一県然り日本又然り」と、協同の大切さを説き、地方産業を盛んにして輸出を増やし以て国益を計ること等「数十の掛け軸地図統計表」を示して諄々と説いた。「五二氏」（前田氏のこと）の風采は一の疑問なり、敝簑破笠足跡全国に洽く勤倹貯蓄を奨励したる」と何処へ行くのも行脚姿であった。そして、大懇親会は運陽館で開催、「楼上五百の人をもって」満たされ、会場は電灯装飾、前田の左右に書記官、警務部長、各郡長が控え煙火轟き、「芸妓総揚げ（これは間違いだと後日訂正）」等々官民総出の大歓迎だ。一方で24日の記事に「五二来れり何を以て之に報いんとする」というのがあって、「食に魚あり坐に珍器あり、出るに車あり入るに妓あり、迎えるに舟あり送るに馬あり云々」コレら皆が「五二に報うる所以なりや」と疑問を呈し、五二会長を喜ばせるならば「会長の如く熱心なれ発憤せよ、県下実業振起したりとの事実を以て証せよ、県下の農商工業を改善し、通商貿易上に島根県の名をあげよ」と真の歓迎は何処にありやと批判的である。

演説会の冒頭でこの歓迎を「正名一己として名誉を貪る如き感あり、数千の貧民に対して誠に恥じ入りたる次第、無用なる費用は日本の為に憂う」、懇親会では「（佐藤梅次郎氏が聴衆に向かひ前田君萬歳を斉唱せんと云いしを五二氏後ろに制して）天皇陛下、皇后陛下、日本、實業萬々歳を連呼して退散せり」等と謙遜したものの25日松江を出発するに当たって、汽船は満船飾で「日本茶業會監督前田正名君　松江市茶業組合」の他に「松江市絹綿織機業組合」「出雲国造酒組合」が旗幟を押し立てるやら、鳥取と米子から歓迎員各々3名が同乗するやら、大橋見送り人は「書記官、参事官、島司、各郡長、実業者等百余名」、同乗しての見送りは橋本第五課長。松本歓次郎だ等とイヤハヤ大変な騒ぎである。英訳辞書を作って仏国へ留学というのも面白いが、それが洋行費稼ぎだった等とは、松江の聴衆にとって知る由も無かったに違いない。

参考「人物叢書前田正名・曽田修」他

あゝ有難や

日大校友会正会員1135番　清水　勇男

一　あゝありがたや有り難や
　若き時代に聴いた唄
　何がそんなに有り難い
　反抗致した若き時

二　やがて幾歳重ぬれば
　次第に解けて恥ずかしい
　思えば年齢重ねても
　知らぬ分らぬ事だらけ

三　そこで悟れば他人さまは
　頭を下げれば教諭する
　あれやこれやとご親切だ
　これがこの世の無償なり

四　人は心の持ち様で
　神も仏もみな味方
　幸福・不幸が決まります
　あゝあり難や有り難や

私の趣味

水墨画や虫飼い　趣味を通し　地域と繋がり

昭和56年法卒　櫻井　千春

好きな田舎暮らしで希望した職務は矢の如く終えた。退職後は別世界にいる感覚をしばらくの間味わい、若い時からしていた「盆栽」で癒され救われた。よく家内から爺臭いと言われたものですが盆栽は世界に普及されつつある。国風展等では外国の方を実に多く見かける。

次に釣りです。現職時には仲間とよく海釣りをした。仲間がいない時はラジオを聴きながらなにも考えず、広い海を眺めながら丘釣りはストレスを解消してくれた。しかし大津波後の釣りは控え、代替えに水墨画に切り替える。

水墨画は墨色と用紙の白との競合で絵を表現し、実に奥深く難しい。私は素晴らしい画の作成を意識せず、目標は低めに絶対諦めないよう心掛け自分で納得した画を目指している。県庁友の会美術展に出品を始めて2回目だが、作品の前で仲間と思い出に写真を撮った。

鳴く虫を育て子供達へあげている。好きな鈴虫、松虫等の鳴く虫を多数育て県内の虫仲間と共に展示会等や無料配布を行い、2百名ほどの子供達に毎年差し上げている。

昨今、子供のいじめが問題となっているが、虫飼いを通して、諺の「一寸の虫にも五分の魂」の如く、子供達に生命の尊さ、生きる大切さを育てていきたい。

現職時の仕事も楽しかったが、今も実に楽しく過ごさせて戴いている。笑うことができることは人間だけである。笑いは副交感神経を刺激し健康に良いとされる。これからも楽しい趣味等を通し、沢山の仲間と連帯し地域との繋がりを大事に人生を楽しく歩んでいきたい。

卒業した自信　～人生の支えに～

昭和59年文理学部卒　薄田　美智子

スクーリングの思い出

私は、文理学部に入学をして、八年かけて昭和59年度に卒業しました。家で勉強が出来るのでいいと思い通信教育に入りました。スクーリングが必須とわかり、ハワイスクーリングに参加。ハンバーガーが大きい、学食のゼリーが甘すぎる。二重ドアロックのトイレなど驚きの連続でした。

夏季スクーリングではスキー同好会に入り、年末年始の蔵王合宿で二四時間以内の忘年会と新年会を経験しました。思いもかけず学生スキー大会に参加しちゃいました。

大学に入ったのだから教諭免許を取ろうと思い、期限ギリギリの卒業でした。在学中は校友と交わり人間的に成長できたと思います。レポート提出、試験では胃が痛くなりましたが卒業したと言う自信はその後の人生の支えになっています。

子育てと介護の日々

主婦になり二人目の出産から九ヶ月で義父が脳梗塞から左半身不随になりました。義母と共に介護をしながら三人目を出産無我夢中で過ごした六年半でした。その後パートへ出、健康のためにテニスを始め現在も続いています。下の子が高校を卒業して駅への送迎がなくなってホッとした頃、義母の介護が必要になり十ヶ月くらい自宅介護して施設に入所。しばらくして父が一人では歩けなくなり肺炎で入院、わずか4日で死亡。介護に専念するために契約更新をせず退職、その二ヶ月後義母が一週間の入院で亡くなりました。

母は父の一周忌が過ぎた頃から気力がなくなり、昨夏心臓肥大で入院し、今年一月永眠しました。

勉強してボランティア

社会との接点を持ちたいと思いカウンセリング講座を受講しました。コミュニケーション力のなさにコンプレックスがあるのですが、相手の話を良く聞き、寄り添うことで役に立てるのなら私にも出来るのではないかと思えました。もっと勉強して機会があればボランティアをしたいと考えています。

校友にひと言

何事にも真摯に取り組んでいる、現在桜友副支部長でもある薄田さんに校友へのひと言を伺いました。「勉強だけでなく校友との関わりも大切にして欲しいと思います」

最新の医療施設となる「日本大学病院」がついに完成

大学創立130周年記念事業の一つとして、建設中であった「日本大学病院」が平成26年8月28日に完成し10月1日に開院しました。従来の駿河台日本大学病院の老朽化に伴い、近隣地であるお茶の水キャンパスに「日本大学病院」と名称を変更して新たに生まれ変わりました。建物は地下2階地上11階建て、延床面積は29817㎡、1階から3階まではエスカレータで通じた大きな吹き抜け構造となっており、開放感溢れる空間となっています。受付業務から電子カルテ、画像システム、会計に至るまであらゆる面において隅々までIT化が実現されています。最新の医療をはじめ、時代のニーズに応えた生活習慣病に重点を置いた医療サービスの提供や人間ドックなどを扱う総合健診センターも備えています。

Since 1971
わたしは、
けっして目立ちませんが、
けっこうお役に立ってます。
代表取締役
佐伯信應
SAEKI NOBUO
株式会社サエキ薬品
〒160-0023
東京都新宿区西新宿4-18-6
サエキビル
TEL.03・3320・6361(代)
FAX.03・3320・6425
E-mail:info@saekiyakuhin.co.jp
http://www.saekiyakuhin.co.jp

謹んで
新春のお慶びを
申し上げます
日本大学通信教育部校友会　高知県支部
顧問　藤田邦夫
会長　岡崎雅美
副会長　水田耕吉
副会長　和田満寿夫
幹事長　田能田明

日本大学校友会大阪支部　副支部長
日本大学通信教育部校友会　副会長
近畿ブロック長
大阪府支部長
津村博文
〒560-0045
大阪府豊中市刀根山六-三-三
TEL〇六-六八四一-四七八七
FAX

日本大学通信教育部校友会　山形県支部
顧問　加藤善一
顧問　小笠原勝
支部長　大塚雄
副支部長　井上太
副支部長　松本衛
副支部長　山口毅
副支部長　佐藤孝
副支部長　三柏憲生
副支部長　武藤好
副支部長　吉田静

日本大学通信教育部校友会　相談役
日本棋院七段・公認審判員
尾上勝美
〒760-0068
香川県高松市松島町三-二三-一七
電話　〇八七-八六一-五五六四

日本大学通信教育部校友会　副幹事長
三上英子
〒166-0003
東京都杉並区高円寺南四-三四-一〇
グランドコート三上六〇一
電話　〇三-三三一一-一二一八

日本大学通信教育部校友会　副幹事長
日本大学通信教育部校友会　石狩支部監査
川田順一
〒004-0848
北海道札幌市清田区清田八条三丁目七-三
TEL
FAX〇一一-八八四-五三四三